

〔書言字考節用集五〕海アジカ鹿海獸志見海鹿俗字順和海獺俗又用此字略

〔東雅十八〕鹿シカ 倭名鈔に略中また本朝式を引て葦鹿はアシカ陸奥出羽交易雜物中に見ゆ

本文未詳といひしは左思吳都賦に見えし潜鹿異物志に見えし鹿魚の類其形鹿の如くなる海

岸蘆葦之間にあるをいひし也即これは海獺といひしものと見えたり葦鹿といふもの東北海

す西南海中にもある也出雲國風土記に葦鹿社葦鹿坂等ありと見えたり海獺は博物志に頭如

馬自腰以下似蝙蝠其長似獺大者五六十斤と見えたり舜水朱氏もアシカは海獺也といひし

の外東海海中にある水獸尙多かり是等

〔倭訓栞阿編一〕あしか 本朝式に葦鹿と書りされど海鹿の義なるべし正徳の韓使に一醫此物

を尋けるに彼國にいふ海鹿也とことふとぞ吳都賦にいふ潜鹿博物志にいふ海獺也といへり

駢カク驅カク駁の數品ありといへり島嶼に出てよく眠るもの也群中に一は眠らずして護ること雁

奴の如しといへり紀の日高郡西南の海中に葦荒島あり年ごとに秋より冬に至り多く波島に

來りて岩上に眠るといへり

〔本朝食鑑十一〕葦鹿訓如

集解葦鹿亦水獸也出自輿之南部津輕松前及蝦夷狀類狗狐屬頭面亦似狗其色黃赤帶青黑遍身

有短毛眼淺青鼻尖黑有硬鬚數莖長六七寸上下臉黑身小如猫前足在臆後而似大鱈後足在尾前

色黑赤如木筆花片其走輕疾入水食魚性好眠每居巖頭而鼾睡故以人之好睡者比葦鹿狀大者爲

雄小者爲雌土人以鋒刺之而煮食其味亦稍佳豆相房上總之海濱亦希有之

肉氣味古甘熱無毒主治未詳

〔和漢三才圖會三十八〕海獺 川獺海獺山獺之三種有之 卽是此云海鹿也重出于後略中

按海獺處處有海中狀獸與魚相半者其大者六七尺頭面至肩類牝鹿而耳小眼大有利齒背身毛細密而短微赤土器色美兩鬢末黑似手是以下腹大肥尻窄有尾長二寸許似龜尾而黑夾尾有鬚黑色